

聞きとり調査

マガダンまで連行されて

千葉県 白土勝雄

昭和二十年十月、占守島からソ連の貨物輸送船に乗せられ、「日本に帰るのだ」とだまされながら北極圏に近いマガダンという山岳地帯に囲まれた港に連行された。船から跳めた山岳地帯はもう雪で真っ白、これはいへんな所に連れてこられたものだと思っても、はや後のまつり、故国日本へ帰れる望みも断たれて上陸させられ、囚人収容所に入れられてしまった。船から降りるとき、ソ連兵たちによる身体検査がおこなわれ、腕時計や万年筆はもちろん、携帯していた一切の

貴重品は取り上げられ、しかも、われわれの隊長がソ連将校の指示を受けながら放屁をしたという罪で一日間食事差止めまでくらってしまった。彼等なりに、指揮官に向かって放屁するとは失礼きわまるということらしかった。

その翌日から、入港している貨物船の荷物の積みおろし作業が始まった。軍隊当時はいくら腹がへっても三度の食事は必ず支給されたので、欠食の心配はなかった。しかし、捕虜の身では必ずという保証はない。一日に支給される食事といえば、黒パン一個と燕麦をつぶした粥が食器に少々、それにナマの鮭が一切れ。つねに腹をへらしながら、零下二十度くらいの間を下する寒さに耐えながら労働に従わなければならない。飢えに加え、厳寒などという言葉ではとうてい言表

すことのできない連日の寒気が、いっそう体力を消耗させていった。

しだいにわかってきたことだが、このマガダンはずンドラの凍土地帯と森林地帯が占め、住んでいる人間も、ソ連の各地から開発のために送りこまれてきた囚人たちがほとんどだった。この北限に近い地帯では自給自足などできるはずがなく、食糧や日常の必需品はもちろん、建設資材の一切を海上輸送に依存しなければならぬ。しかもそれは十二月いっぱいまでのことだった。港の凍る一月から四月いっばいの四か月間は、氷原に取り残された陸の孤島になってしまう。

一緒に働くのが、十年とか十五年とかの刑を言い渡されて送られてきたソ連の囚人たちである。しかも、それを監視するのがソ連の兵隊である。われわれやソ連の囚人たちが監視の眼をぬすんで、黒パンや缶詰などのかっぱらいをやれば、彼等監視の兵隊たちは兵隊たちで、おおっぴらに紅茶とか角砂糖を私物にして持ち帰ってしまう。それもお互いが生きのびる手だてだったのだろうが、お互いに見て見ぬふりをしながら

かっぱらいを重ねる図は、捕虜か囚人でなければできなかったことだろう。

港が凍結してしまい、船が入ってこなくなったので、こんどはマガダンの町から七十キロとか八十キロほど奥地にあるハッセン炭鉱の坑内作業につくことになった。ハッセン炭鉱は収容所までマガダンからトラックで二時間ぐらいかかったが、その二時間ほどのあいだ寒さのため凍傷になり、手足の指を切断した仲間が何人も出たほどである。

炭鉱内の作業は石炭の採掘が主だった。保安設備は皆無に等しく、裸電球がところどころにほんやりと灯されている程度のため、つねに危険がともなっていた。採掘作業は主に石油にポロ布の芯をひたしただけの粗末なランプを使っていたが、ランプの煙で、坑内を出て見ると体じゅうが真っ黒、鼻をかめば真っ黒な鼻汁がでる。痰をはけば真っ黒い痰がでる。私は、あれから四十年近く経った現在でも慢性気管支炎で苦しんでいるのは、そのときの後遺症ではないかと思っている。採掘された石炭は、手提げランプの灯りをたよりに

選炭場まで運ばれるのだが、坑内整備がされないため、地盤沈下を起こしたり、坑道の支柱が歪んできたりで、トロッコと支柱の間に手を挟んで負傷する者が少なくなく、ときには頭を挟まれ、頭蓋骨陥没のため死亡する仲間もあった。ノルマを上げるためには、われわれ捕虜の生命など犬猫と同じだったのである。われわれはそのあまりもの非道さに、何回かソ連に抗議したこともあった。しかし、そのつど一時的には坑道内の電球が多くなって明るくはなるが、それも数日間だけで、またもとの暗くて危険な状態に戻ってしまう。作業の安全と保安のために指導する立場に立つはずのソ連の兵隊たちが、坑道内に新しく取りつけられた電球を自分の家に持ち帰ってしまうのである。つけるとはずして持ち帰ってしまうのイタチごっこの繰り返しでは、作業場の安全など保証されるはずがない。ソ連という国はまったく不思議な国なのである。

われわれは占守島に駐屯していたので、零下二十度くらいの寒さには慣れていたが、ここハッセン炭鉱は零下四十度が普通で、少し寒いと思うと零下五十度に

は下がっており、零下六十度とか、あるいはそれ以下になる日もあったかもしれない。ともかく、そのような想像を絶する寒さのなか、特に午前零時から八時までの作業は言葉では表せなかった。走ってくるトロッコに危険を感じながらも、寒さと栄養失調から身体をかわすことができずに怪我をする者が多く、なかには死亡するものすらあった。

冬になると北の空に七色に妖しくゆらぐオーロラが現われ、夏には日没が午後十時ころで真っ暗な夜になる日がない白夜である。冬には、はるかな北の空にオーロラを仰ぎ、夏には白夜の眠れないままふるさとの夢にいくたび泣いたことか。私は幸いなことに、二度目の冬に入る前に、体を悪くしてハッセン炭鉱を出たのだが、もしもう一年この炭鉱で越冬していたら、生きて日本の土を踏むことはできなかつただろうと思う。